
空下の生命

珈落空鳥熾

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

空下の生命

【コード】

N2105B

【作者名】

珈落空鳥熾

【あらすじ】

日の暮れる頃。佇む私の前には、自分の体が横たわっていた。その理由を追いながら、私は考えを見直し始め出していく。

2008年10月中旬頃までに頂いた評価を参考に、色々と文章を改善しました。誠にありがとうございました。

(前書き)

手にして頂きまして、ありがとうございます。

空下の生命

何でこんな事に
なるのかな……。

「おい！ お前っ、よくも娘を！」

夏が終りに入った季節のためか、Tシャツ上から薄での上着を羽織るジーパン姿の中年男性がいた。
中年男性は自転車から降り立つと、真っ直ぐ白い小型トラックに向かっていく。

そして、側に立つ車の持ち主らしい男性運転手の胸ぐらを掴み上げ、怒鳴りつけている。

顔は険しくて眉間に皺を寄せ、目は血走っていた。

吐く言葉は大きく、巻き舌でヤクザと変わらないこの中年男性は、私の父親だ。

普段は温厚な人だが、今は気が動転している。

“何故？”

それは、男性の前から然程遠くない位置にいる人物のせいだから。白いシャツを茶黒く汚し、所々擦り傷が見えている。

無機質なコンクリートの地面に力なく倒れる少女がいた。

“それが私”

そして、倒れる私を覗き込むように見下ろす私が側にいる。意識はすっかり痛みも何も無い。至って普通の状態。ただ、周囲の人間には私の姿が見えていない。

丁度、日も暮れ出した頃。場所も飲食店前のため、人通りがある。勿論、店側も出入り口前で大声を上げる人間がいたら、商売に差し支える。

私も恥ずかしいから止めて欲しい。相変わらず運転手を責める父親の側に行き、“止めて”と、腕を掴もうとするが、擦り抜けた。

やっぱり駄目らしい。私は言葉で表すなら幽体なのだから。そうこうする内、遅れて同様に自転車から降り立つ母親の姿が。

父親をなだめ、現状の把握に務めようとしている。

まず、私の何も反応しない体の側に寄り、所々触りながら生死を確認。

そして、父親と同様に責め始めた。

いや、だから止めてよ？ お母さん。

暫くすると、聞き慣れた音が入った。何とも高らかに進み来る白いバンが一台。

赤点灯を周囲の車に見せながら、私達の前に止まり、中からは白

衣の救急隊が駆け寄ってきた。

後ろには白黒パトカーも待機している。

同様に現場へ降り立つと、警察官が事情を付近の関係者に聞いている。

責める両親と、小型トラックの持ち主を引き離しながら。

その時、一人の青年が母親の方に近付いた。

「警察の方にも話しましたが、僕は急ぎで今日はこの場を離れます。何か証言が必要になりましたら、ここに連絡をして下さい。僕が見た事を証言しても良いですから」

去り際に、母親へ自分の電話番号をメモした紙を手渡した。

そして、マウンテンバイクに跨ると、背負ったリュックと共に現場を後にしていく。

バイト？

試験かな？

忙しい中、付き合ってくれてありがとう。

彼方に消える青年を見送りながら、私は心の中で呟く。

若いのに誰よりも冷静であり、対処をしてくれていた。

私が乗っていた自転車を邪魔にならないようにと、壁際に立て掛けてくれたし。

現場から、自分のトラックで私を病院へ連れて行こうとした運転手。

その運転手にここで待つように促し、そして、持っていた携帯電話

話から救急車に通報していた。

“感謝します”

私は『交通事故』にあった。

こんな時、救急車に通報すれば警察官と共に来てくれる。

そんな風に私も聞いた事がある。

だから、現場維持に務めるべきなのだ。

何故なら、個人同士は警察沙汰が怖くなり、逃げたりと色々差し支えてくるために。

私の手荷物から携帯電話を探し出し、登録していた自宅へかけて、両親に連絡をしてくれた。

自宅から現場迄は、十分とかからない距離。

そのため、先に父親が自転車を飛ばして、現在に至る。

私の体に乗せた台が、救急車へ運ばれていく。閉じられた扉の物音が重く、運命の分かれ道のように感じる。

私の体は、一緒に乗り込んだ両親共に現場を後にした。

残された場所では、警察官達が現場検証を始めだす。

私は救急車が行く坂道を眺め続けている。事故にあつ前は、この坂道を自転車を下る最中だったから。

この道は大きな道路が側を通り、よく事故が起こりやすい。隣の市と市を結ぶ国道のように長い一本道があり、坂道になっていた。

反対側には飲食店が個性を競い合うように、奇抜な看板と共に並び建っている。

駐車しようと車が歩道を横切り、左折する姿はよく目にした。

今回の事故も全く同様であったが、私は悪くはない。

何故なら、左折表示ウィンカーも出さずに一時停止の確認も無しで、車が急に左折をしたから。

おかげで、直ぐ後ろを勢いよく下る私は、避ける間もなくぶつかり転倒した。

当たる瞬間は覚えていない。怖くて（痛み）目を瞑り、気がついたら幽体として佇んでいた。

ただ、衝突地点から体がかなり離れているために、ふっ飛んだらしい。

「さて、どうしようかな？」

見上げる空は濃い青、紫、オレンジ混じり赤の三色グラデーション。

所々に星が輝き、美しく何故か心が安らぐ。

「まあ、いいか……」

溢れた言葉。

何がって？

人生よ。

私、正直に今思うと、この世に未練がない。

まだ十代後半だけど、昔からお小遣いを貰う事もなくて、高校生

になってからはバイトをしている。

そのおかげで、欲しい物は色々と手に入れてきた。

行きたい大学にも入れて、課題の山だけど楽しく取り組んでいる。

それは、一緒にいる友達のおかげだと思う。そういえば、今から会う約束をしていた春菜には悪いな。

すっぱかす形になってしまったから。

家族、父親・母親との仲も至って普通だった。冗談が好きな子供っぽい両親。

二人共童顔であったためか、私も歳の割りには若く見られてきたから、それなりに得する事も多い。

兄が一人いるけど、今は家を出て寮生活をしている。最近会ってはいないな。

恋人は昔別れて以来、今はいないけど、若いなりに楽しい人生だったと感ずる。

何処かで聞いた言葉が頭を横切った。

『若いまま死ぬ方が幸せだ』

そうかもしれない。

でも、今は体がどうなったのか気になる。

妙な話したが、自分の死ぬ所を確認しないと気が済まないのだ。

どうすれば良いんだろうか。眺める先にいた救急車の姿は、もう見えない。

向かった病院は私には解らないし、幽体だけど地に着く二本足。

周囲の人影が無機質なコンクリートに伸びているのに、私の体からは何も無い。

TVでは浮く姿を見るのに、実際はその気配すら無い私の体。

地を一蹴りしてみる。

だが、地球の引力には敵いそうになく、静かな着地音が響いた。

残念とばかりに、足元へ目を凝らした。

その時、何かが強く私を導くよう、目前に光の渦を作り出し始めた。

道路、向こう側の景色を歪める光の渦。

一瞬の事だ、驚く私を包むように目前の景色が眩しい光と共に白くなった。

恐る恐る再び目を見開けば、車の行き交う音は無くなっていた。

見慣れた白衣姿や、寝巻き姿の人が私の横を通り過ぎる。

人々の行き交う白い空間。そこに私は佇んでいる。

「ここは、病院？」

独特な薬品の匂いが周囲を包み込む。

私の体が運ばれた先はここかもしれない。そんな考えが浮かぶ。

この場所でも、私の姿は誰一人として気付かれない。

壁に張り付けられた、建物の見取り図へと近寄り位置を確認すると、緊急時の出入り口へと急いだ。

外へ通じる扉先の側には、先程着いた様子の救急車が大きな口を開け、停車していた。

振り返り、直ぐそこから行ける手術室に足を向け、駆ける。

暫くすると、椅子前に座り込む父親と母親の姿が見えた。落ち着かない様子で、座席に座ったり立ったりしている。

その側では、鉄の扉が危険信号のように、赤い灯りを点滅させながら重い陰を落としていた。

少し荒れた息を整え、両親と一緒に私も待つ。

その間、座席前に掛けられた壁時計の秒針音が響き、静まり返る廊下では耳についた。

長い時間経つ気がしてきた頃、鈍い物音と共に扉が開かれる。

中から現れた医者と看護婦、そして押し運ばれる私の姿。

直ぐに駆け寄り、医者に状態を聞く父親と体を追う母親。

私は医者 of 返事を聞く事にした。

「今夜迄に意識が戻らない時は、残念ですが。例え生きても、意識が無いなら植物状態になるでしょう」

そう言い残すと医者は立ち去った。父親は身震いする体を抑えて、母親の後を追う。

私もその後をただ黙りついて行く。やがて一つの個室へ着いた。

重症患者が入る一室の中で、私の体が横たわっている。

生命装置の機械が、体と命を繋ぐ糸になり絡みあっている。

側では付き添ように母親が椅子に座って、顔を覗き込んでいた。

「そう、今夜が……さつき家を出る迄は元気にしていたのに何で？
綾？」

父親から症状を聞かされ、動揺の色が声や顔に浮かんだ。
母親は私の体、手を握りながら右手で顔を撫でている。

その顔は嘆き涙が酷くなり、毛布に顔を埋めていた。

……お母さん……

母親の肩に手を置き、佇む父親が身震いをしながら私の顔を覗き込む。

「綾、親より先に逝く奴は、親不幸以外の何者でもないぞ！」

……お父さん……

大粒の涙を隠しもせず、ベッドへ横たわる私の体上へと落とす父親の姿があった。

何年振りかに見える父親の涙。何故か、その姿は普段の威厳も何もなく小さく見える。

気をとられていた私の背後では、扉の開く音が聞え、振り返る間もなく横を誰かが通り抜けた。

「父さん、綾は！？」

今時の若者らしく、大きめの服に身を包み黒いズボンからは、お洒落のためか銀の鎖が見えている。

私の兄だ。事の詳細を聞き、絶望的な状態に一瞬顔が歪んでいた。

「馬鹿、何てドジなんだお前は！俺とあの時、喧嘩したまま仲直りしてないだろうが！」

“喧嘩”とは他愛もない事。

たまに帰った兄に対して、その時たまたま機嫌の悪い私がいた。

買い置きのジュースを飲まれて怒り狂い、それ以来、疎遠だった。何だか聞いていたら思い出して現在でも腹が立つ。何もこの場で言う事なのかと。

兄の側に行き、擦り抜けるだけの拳でも握り、顔を覗き込んだ。いつもの変わらない表情があると思っていたから。

だが、兄の顔からは透明の滴が溢れていた。何よ、何で？涙を流してるのよ？

……お兄ちゃん……

皆……私は、もう良いのに。

私が消えたからって、地球規模で何かが変わるわけではない。

そんな考えや感覚がずっとあったから、寂しくないのに。

“でも、本当にそうなんだろうか？”

雪のように白く冷たい病室に、嘆く声と涙。

それを見ていたら、何故か自然と私を体前へ進めさせた。

地球規模で変わらないのは確かだけど、私の心に生まれた想いは

何だろうか？

現すように、視界を滲ますこの涙は何だろうか？ 三人の姿を見ていると……。

神様なんて曖昧なモノは信じていない。現実で実際に生きているのは私だもの。

だから、横たわる私の顔に手を触れよう。

「確かに十分な人生かもしれない。でも私は……綾として家族でいたい、妹でいたい。この人達の側で一緒に生きたいの！」

“お願い私を戻して！”

まだ生きたいと感じている。

まだ見ていない世界、景色や人もいる。私はこの先の人生も見たいと思う。

この家族と共に。

擦り抜ける手が顔の頬を貫いた瞬間、暖かい光が指先から伝わった。

一瞬にして私を包み、眩しくて目を瞑った。

視界の世界は白く、妙な機械音が耳につく。気のせいかな、体が重くて痛い。

何が起こったのかと、暫く視界をさ迷う内に、知った声が聞こえて、霞む視界の先には顔が覗かせている。

母親は相変わらず泣き崩れていた。

父親は安堵の笑みを浮かべ、兄は照れ臭いのか涙を拭き隠している。

“そうか……生き返れたのか……”

安堵感から再び目を閉じ、私は眠りにつく。

耳元では、三人の涙声が、いつまでも心地良く聞えていた。

その後、私は療養をして病院を退院した。

聞けば思ったより外傷も酷くなく、頭を打っていたが、異常があるわけではないとの事。

意識が何故か戻らないとの事だった。

打ち方が良かったためか、昔聞いた人間の持つ馬鹿力のせいか。

普段人間は本来の力を何%も出せていない。そんな話しを思い出していた。

見上げる空は青い。

綿菓子の子白と一緒に気ままに流れて行く。

届かない程、深くて高い。地球を包み込み、優しく厳しく表情変え見守っている。

自転車に跨り、ペダルを踏みしめて私は爽快な空の下をこぐ。

風の匂いを感じ、陽射しを浴び、新たな沢山の気付きに出会っために。

“私という人生を歩む”

「綾ちゃん！」

あの日、約束より一時間過ぎても待ち続けた春菜。陽射しの加減が眩しく見える。

可愛くまとめた艶ある黒髪を見せて、優しく微笑む。

病院を退院した後日、再び会う約束を報告も兼ねてしていた。

「ごめんね、待った？」

「大丈夫だから！」

更に笑顔が増す。

春菜を自転車の後ろに乗せ、今日は大きい公園へ旅をする。

彩る会話が私の背から聞えてくる。警察官には気をつけながら、空の下を元気な二人が行く。

笑顔と笑い声が溢れ出して、街に色を増やす。

(後書き)

この作品は2006年11月上旬に一度掲載した作品です。

(違うサイト様です)

更に手直して物語を創りました。なので完全版
『空下の生命』です。

(好きな作品なので掲載しました)

ここまで読んで頂き、有り難うございました。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2105b/>

空下の生命

2008年11月7日07時17分発行